

朝ドラの海外受容 —台湾の放送状況及び掲示板の分析を例に— Overseas broadcasting of “Asadora”: A Case of Analyzing of the Broadcasting Situation and Internet Discussion Boards in Taiwan

○黄 馨儀
Hsinyi HUANG

台湾中国文化大学日本語学科 助教授
Chinese Culture University Department of Japanese Language and Literature Assistant Professor

要旨…本研究は台湾を事例にNHK朝の連続テレビ小説（以下、朝ドラと略す）の海外受容を考察するものである。朝ドラの代表作である『おしん』は世界64カ国で放送され、台湾でも90年代に「おしんブーム」を引き起こした。台湾では近年、日本の番組の専門チャンネル「緯来日本台 (Videoland Japan Channel)」¹が朝ドラの版權を購入しており、2010年以降の作品はほぼ放送されている。これに注目し、「緯来日本台」のホームページに設置されている視聴者の交流を図るインターネット掲示板「討論区」で最も議論されている二つの作品『カーネーション』（2011）、『あまちゃん』（2013）を対象に、掲示板の内容を分析し、朝ドラの海外受容を考察した。分析の結果、視聴者が『カーネーション』のヒロインの糸子の性格・行動を高く賞賛し、共感を覚えたことがほかの作品より多くの投稿が寄せられた理由であると考えられる。なお、戦争に関する描写に対しては、反日派と親日派の異なる立場からのコメントが現れる傾向がある。一方、『あまちゃん』（2013）は番組名や「じぇじぇじぇ」の翻訳に対する論争から、視聴者の番組への注目度の高さ及び視聴者による再視聴の行動が観察できる。なお、掲示板への投稿からヒロインに対する好感も観察できたが、物語の展開や脚本家の賞賛も書き込みの特徴であり、番組全体の魅力の高さが『あまちゃん』の人気の要因であったと考えられる。台湾における朝ドラの受容は「文化的近似性」が土台にあり、台湾と日本の文化コンテンツの共有が視聴者の共感を呼ぶ大きな要素だと言えるが、二つの番組はドラマ自体の魅力も需要において重要な役割を果たしている。以上の分析から、台湾での朝ドラブームの再燃が確認できた。

キーワード 朝の連続テレビ小説、日本文化の海外受容、朝ドラ研究、インターネット掲示板

1. はじめに～朝ドラとは

朝ドラは日本の「国民的番組」と称され、1961年の初放送以降、50年以上も放送され続けているテレビドラマシリーズである。日本国内だけではなく、海外においても数多く輸出され、放送されている。その中でも朝ドラの代表作といわれる『おしん』（1983）は80年代から90年代にかけて、世界64カ国で放送され、アジア諸国を中心に大きな話題を引き起こした。テレビドラマによる日本文化の海外受容を観察するため、本研究は90年代以降、日本のテレビドラマの解禁によって「哈日ブーム」を引き起こした台湾を焦点に、その受容史及び放送状況、掲示板の分析を通し、日本文化はいかに台湾に受容されているのかを紐解きたい。

2. 先行研究及び研究方法

(1)朝ドラに関する国内・海外研究

朝ドラに関する研究は、70年代の朝ドラ及びその視聴者を調査した牧田（1978）をはじめ、80年代には「『おしん』ブーム」を中心に研究が蓄積されていた。単一作品に対する研究のほか、黄（2014）は朝ドラの番組特徴を系列的にまとめ、朝ドラに描かれている女性像及びその社会的機能を中心とした研究を行った。90年代後半には欧米を中心に海外でも朝ドラに関する研究が行なわれてきた²。Rahoi(1996)は朝ドラの代表作、『おしん』を欧米のソープオペラとして定義し、朝ドラの持ち合わせる教育的機能について論じた。Harvey(1998)は『おしん』（1983）の教育性を取り上げ、朝ドラには強い教育メッセージが含まれていると指摘した。また Yano（2010）は2002年のハワイ在住の日系女性を主人公とした作品『さくら』の制作側から消費者側

までのメディア効果を検証した。一方、台湾における朝ドラ研究は、90年代に『おしん』の視聴者受容を中心に調査した林（1996）のほかはほとんど手付かずの状態である。本研究は台湾における朝ドラ視聴の現状を探究する第一の段階として、台湾での朝ドラ受容の経緯を整理しつつ、問題意識をさらに明確にしたい。

(2)台湾における朝ドラ受容

台湾は朝ドラの放送の歴史が長く、1993年に「有線電視法」が施行され日本の番組の放送が合法となった翌年の1994年に「中国電視公司」³が『おしん』の版權を購入・放送したのが始まりである。「おしんブーム」を巻き起こし、「おしん精神」という流行語を生み出した『おしん』の放送は、現在にも通じる社会文脈となった。台湾における朝ドラの放送を表1にまとめた。表1から二つの特徴が挙げられる。朝ドラはまず、1994年から1998年に集中して放送された後、長い空白期があった。再び放送が集中する2010年からは「緯来日本台」が放送を担当するようになった。

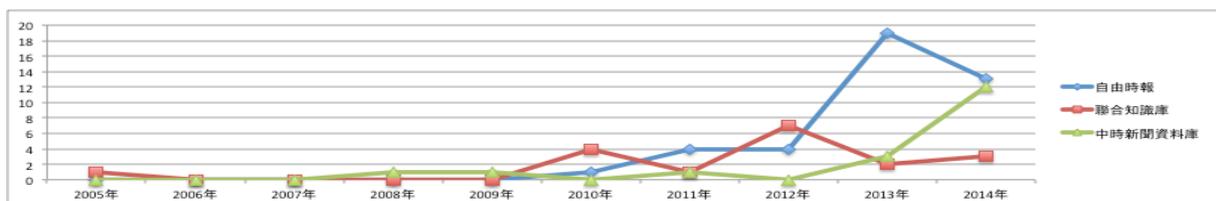
表1 台湾における朝ドラの放送史

年度	番組名	訳名	放送局	台湾放送年
1983	『おしん』	阿信	中視	1994年
1985	『霧つくし』	阿香	緯来日本台	2005年
1988	『純ちゃんの応援歌』	小純的加油歌	國興衛視	—
1994	『君の名は』	請問芳名	中視、JETTV	1995年、2008年
1995	『ひまわり』	向日葵	國興衛視	—
1996	『ふたりっ子』	雙胞胎	國興衛視	1998年4月
	『あぐり』	雅久里	華視	1998年5月
1997	『天うらら』	天高氣爽	國興衛視	2000年4月
1999	『すずらん』	鈴蘭	國興衛視	2000年7月
2000	『私の青空』	小媽媽的天空	台視	2005年
2001	『ちゅらさん』	水姑娘	國興衛視	2002年
2006	『純情きらり』	櫻子	緯来日本台	2010年3月
2007	『どんと晴れ』	旅館之嫁	緯来日本台	2010年9月、2013年5月再放送
2010	『ゲゲゲの女房』	鬼太郎之妻	緯来日本台	2011年5月
2010	『てっぺん』	幸福鐵板燒	緯来日本台	2011年
2011	『おひさま』	陽子	緯来日本台	2012年5月
2011	『カーネーション』	系子的洋裝店	緯来日本台	2012年11月
2012	『梅ちゃん先生』	小梅醫生	緯来日本台	2013年5月
2013	『あまちゃん』	小海女	緯来日本台	2013年11月、2014年4月再放送
2013	『ごちそうさん』	多謝款待	緯来日本台	2014年5月
2014	『花子とアン』	花子與安妮	緯来日本台	2014年11月
2014	『マッサン』	阿政與愛麗	緯来日本台	2015年5月

本研究では、台湾における朝ドラの放送史を以上のようにまとめたうえで、『おしん』が放送された1994年前後を第一期、2010年以降の「緯来日本台」で集中的に放送される時期を第二期とする。また、なぜ2010年以降に朝ドラが頻繁に台湾で放送されるようになったのか、主な放送局に問い合わせた結果、「近年、朝ドラの表現技法などが昔のものとは違って斬新が見られ、視聴者層も伝統的な主婦だけではなく、本テレビ局が求める視聴者層と一致している」⁴との回答があり、近年の台湾における朝ドラ放送はある程度の評価を得ていることがわかった。

また、台湾で朝ドラはいかに報道されているか、台湾社会とのつながりを考えるため、台湾の三大新聞のデータベースを「晨間劇⁵（朝ドラ）」というキーワードで直近10年のデータを検索し、以下のような結果を得た。

グラフ1：台湾新聞紙のデータベースシステムの記事件数



グラフ1から、2010年を境に3紙ともに記事件数が急増し、特に2012年の『聯合知識庫』、2013年の『自由時報』の件数が

突出していることがわかった。この結果は、前述した問い合わせへの緯来日本台の回答と一致しており、2010年以降の朝ドラが台湾で大きく注目されていることから、本研究は近年の台湾における日本文化の受容研究の一環として2010年以降に台湾で放送された朝ドラ作品の受容を明らかにすることを研究目的とする。朝ドラの受容の現状を観察するため、視聴者の反応を探ることができる掲示板分析を行う。

(3) 掲示板分析及び研究方法

視聴者に関する研究はオーディエンス研究の側面から、アンケート調査、インタビュー調査などを含め、質的及び量的調査など様々な研究手法が存在している。齊藤（1998：35）はJensen & Rosengren（1990）の論文を引用し、オーディエンス研究の問題関心に基づく研究領域について、①効果研究、②利用と満足研究、③文芸批評、④カルチュラルスタディーズ、⑤受容分析の五つの潮流に分けられると指摘した。本研究は台湾における朝ドラの受容を観察するため、⑤の受容分析に当てはまると考えられる。また、視聴者の反応を観察する手段として、西田（2009）はインターネットの書き込みを分析する掲示板の投稿分析について、「インターネット上の反応を見ることで、日常生活の中でオーディエンスが調査者に聞かれたことではなく、自発的にテレビについて語っていることを文字にして比較に容易に観察することができる」と説明した。本研究はまず、2010年以降に台湾で放送された作品を整理したうえで、作品ごとに投稿されたコメントの数量を記録する。その受容の概況を明確にした後、最も議論されている作品を選出し、掲示板の書き込みの分析を行う。研究方法として、本稿は主に長谷川（2004）の論文で提起された方法を参考に、掲示板の発言に関するカテゴリを作成する。書き込みの内容を、「挨拶」のメッセージ、ドラマへどれほど熱中しているのかを語る「自己紹介」、ドラマの内容、出演女優（俳優）、使用された音楽などについて述べた「ドラマの感想」、ドラマに関する様々な「情報訴求」、それに答える「情報提示」、「日本関連情報」、朝ドラというシリーズの関連作品に関する投稿の「朝ドラ関連情報」、以上のいずれにも当てはまらない「そのほか」という8つの項目に分類し、分析する⁶。

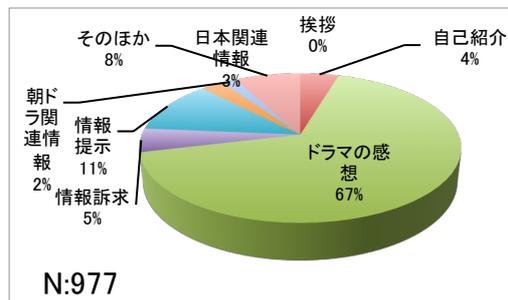
3. 分析結果

研究対象となる「討論区」は、緯来日本台が番組のために設立した掲示板で、作品ごとに掲示板が存在し、匿名で番組に関する感想や議論したい話題を投稿する場である。作品ごとに投稿トピック数をA、コメント総件数をBとし、カウントした結果⁷、各番組のAとBは、『ゲゲゲの女房』が135件と521件、『てっぱん』が67件と271件、『おひさま』が36件と127件、『カーネーション』が161件と977件、『梅ちゃん先生』が65件と468件、『あまちゃん』が145件と724件、『ごちそうさん』が50件と202件、『花子とアン』が65件と184件である。データから見ると、最も話題性が富み、議論されたのは977件の『カーネーション』と724件の『あまちゃん』である。本研究は、朝ドラの台湾受容の基礎研究の一環として、上位二位の『カーネーション』、『あまちゃん』の視聴者コメントを記録し、各番組の人気理由について観察し、考察する。

(1) 『カーネーション』（2011）の視聴者受容：掲示板の分析から

・投稿内容のカテゴリと件数

グラフ2：『カーネーション』投稿内容のカテゴリ（%）



まず、長谷川（2004）の方法を援用し、投稿内容のカテゴリを記録する。全977件の投稿内容を分析した結果は以下のとおりである（紙幅の都合上、ここでは主要カテゴリの結果のみ示す）。「挨拶」の投稿は長谷川の研究と相反し、0件であった。自身のドラマへの傾倒ぶりを語るなどの「自己紹介」が25件（4%）、「ドラマの感想」が最も多く651件で67%を占め、ドラマに関する情報訴求が50件（5%）、それに回答する「情報提示」が111件（11%）、「日本関連情報」が27件（3%）、「朝ドラ関連情報」が16件（2%）、「そのほか」は放送時間や広告への意見などで77件（8%）である。投稿は初放送された2012年の年末に集中しており、特に「ドラマの感想」という項目では、ドラマの展開やヒロインの糸子を中心とする登場人物の性格・生き方などに関する意見の交換が熱心に行われた。また、「情報訴求」と「情報提示」の項目では、当番組の関連商品や再放送、再再放送の時間調整を希望するコメントが目立つ。

・投稿内容の特徴

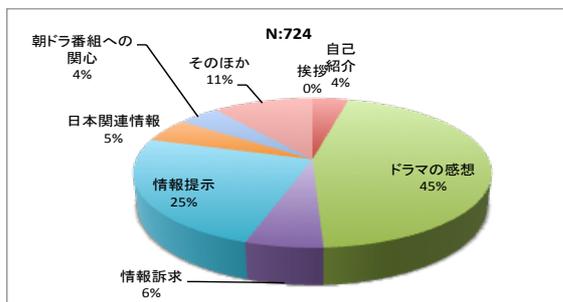
詳細はグラフ2に示している。ヒロインを中心に、幼馴染の勘助や相手役の勝と周防、父の善作と母の千代、娘たちに関心

を寄せる投稿が極めて多い。ここでは紙幅の関係で、相手役及び糸子の性格について語る一部の内容のみ見ていく。①利用者：rosy (2012/11/27) は「勘助」のトピックに「勘助の性格が弱いから戦場で人殺しなんかできないよ」と意見を投稿した。これに対し、「多くの映画でも戦場から帰ってきた人々の心境の変化に触れている。勘助は弱いかもしれないが、戦場の残酷さは私たちが想像できるものではないよ」「桜子（『純情きらり』）の旦那も戦場から帰ってきて人が変わったわ。戦争はやはり地獄だね」「二回目の出征は自殺のような感じがする」と、勘助と糸子の仲に言及しながらも、戦場に向かう勘助の運命を嘆く視聴者が多かった。②利用者：糸子最愛誰 (2012/11/24) が「川本勝」のトピックに、なぜ勝は糸子と結婚したのか、また勝の浮気を糸子は許すべきか質問し、「糸子の才能を狙いにヒモになった」「勝は本当に浮気したのか」「浮気はあの時代では当たり前だ」などと議論が盛り上がった。③利用者：欣 (2012/12/17) の投稿「糸子は周防のことが好きなの？」に対しては、糸子が周防の家庭を考えず恋してしまったことを批判し、夫の勝に同情する意見と、糸子を擁護する意見の対立が目立った。例えば「朝ドラだから、最終的に糸子は周防との恋を諦め、相手の家庭を壊すまではしなかった」「不倫や恋より、糸子はいかにファッション界に影響を与え、女性の自覚を促したのかがこのドラマの見どころだ！」と激論が交わされたが、そのなかでも「糸子の逃げることなく、みんなに責められても堂々と向き合う勇氣は素晴らしい」など、糸子を擁護するコメントが多く寄せられた。また、糸子の男勝りの性格、考え方を賞賛するコメントも目立つ。④利用者：安安 (2012/11/8) が「夢を追いかける欲望」というトピックに投稿した「このドラマの見どころはまさにヒロインが夢を追いかけるために生きるところだ。だんじりに乗れず、自分の夢と情熱をすべてミシンに注ぎ込むことは素晴らしい」という意見には、「そういうミシン、おばあちゃんの家もあったよ」、「当時は女性の自立が難しい時代だったし、実在する人物の糸子の物語は実に素晴らしい」などのフォローがあった。⑤利用者：heroine (2012/12/8) による「新時代における女性の思惟」というトピックには11件の反響があった。糸子をこれまでの朝ドラのヒロインとは異なるとても勇氣のある女性だと賞賛し、「戦時中、愛国婦人会の徴収に勇敢に立ち向かい、拒否する行動」、「玉音放送が流れても冷静にご飯が食べられるなんて、すごい」、「戦時中にもかかわらず糸子は派手に葬式をして、人に『非国民』と呼ばれても、闇市の商売などをしても・・・凄く勇氣のある行為だ」、「NHKはなぜこのドラマを製作したのか、世論の反対を気にしないのか、または女性の教育のためか」など、昭和時代において糸子は相当に進んだ考えを持つ女性であるとして、肯定的な評価を与えた書き込みが多かった。⑥利用者：tingmimie (2012/11/28) は善作が亡くなったことにショックを示し、「もう見ません！」というトピックを立てた。これには「戦争が始まった時点でもう見なくなった！我々中国（台湾）の敵だった日本のはずなのに、なぜみんなは日本ドラマを見るんだろう！」「中国の歴史と台湾のとは違うよ！笑わしい」「台湾人はかつて日本人だったよ。中国こそ敵国だったわ」など戦争の話題で筆戦が起こった。以上のように、掲示板ではヒロインを中心に話題が展開され、特に糸子の性格・行動を高く評価し、新しい女性として賞賛したものが多かった。また、糸子を中心とする人間関係、勘助との仲、勝・周防との恋、娘三人の教育などに注目する投稿内容が集中していた。ストーリーの展開や登場人物の死去の議論から「戦争の設定」に関する議論に発展する傾向があり、戦争描写が苦手な人の投稿や、反日や親日の話題に転換する投稿もしばしば見られる。

(2) 『あまちゃん』 (2013)

・投稿内容のカテゴリーと件数

グラフ4：『あまちゃん』投稿内容のカテゴリー (%)



『あまちゃん』対しても同じ方法で投稿内容のカテゴリーとそれぞれの件数を確認した。全724件の内容は以下となる。

「挨拶」は『カーネーション』と同じく0件であり、台湾の視聴者は掲示板に書き込む際に、挨拶せず発言する傾向が見受けられる。また、ドラマへの傾倒ぶりを語る「自己紹介」は28件で、4%に止まったが、ヒロインのアキの可愛ささに心酔する発言や、放送終了後の「あまロス」（失落感）をアピールする投稿から、視聴者のドラマへの熱中ぶりが読み取れる。また、

「ドラマの感想」が328件で全体の45%を占め、放送前から『あまちゃん』という番組名の翻訳についての激論があり、放送開始後はヒロインのアキと親友のユイの運命の違い、春子の母親像に賛同できない意見や、ヒロインの職業変化について理解できない発言もあった。「情報訴求」にはDVD、劇中歌（潮騒のメモリー）の入手方法や、毎日二時間の放送枠に対する質問などがあった。それらの質問に熱心に回答する「情報提供」は177件の25%であった。『カーネーション』と比較して、『あまちゃん』の掲示板投稿の特徴として、同じ質問が繰り返し投稿されたら、「投稿する前にせめてマナーを守れ！」「同じ質問

を何回もする人がいるのよ。バカじゃないか」という攻撃的なコメントがしばしば現れる点がある。「日本関連情報」は38件の5%で、番組に登場した役者の情報、紅白や80年代のアイドルの話題が取り上げられた。ほかの朝ドラに関する情報を投稿する「朝ドラ番組への関心」は32件の4%である。「そのほか」は78件の11%を占め、放送局の予告でのネタバレに対する不満に集中している。

・投稿内容の特徴

ここからは、各カテゴリでの特徴的な発言をコメントが10件以上寄せられたトピックを選び、分析する。

「自己紹介」では、①利用者：御宅怪胎(2013/11/17)が「アキの萌え場面」のトピックに、「自分はアキの可愛さに惹かれてこのドラマにはまったが、みんなも自分にとってのアキの萌え場面を教えてよ」と投稿した。これに対し、「アキが海女の服を着た時」「アキが海に飛び込むシーン」「アキが初めてじえじえを言った時」「アキが歌った時」などの書き込みがあり、視聴者がいかにアキという役に夢中になっているかが読み取れた。「ドラマの感想」では、番組名の翻訳に対する疑問の投稿で掲示板が炎上した。『あまちゃん』の正確な翻訳は『海女小天』か『小海女』かが、放送前から話題となり、すでに『あまちゃん』を視聴したと思われる視聴者（NHKのBS放送を含め、非正規のルートでの視聴の可能性もある）が、緯来日本台で放送される際のタイトルについて、②利用者：遊人(2013/10/23)は「海女小天」のトピックに、「なぜ『小海女』なの？ありえない」と投稿した。これに対し、「『あまちゃん』はそもそもいろいろな意味があるから、どっちもよいのでは？」「『小海女』がいいと思う」「『海女小秋』のほうがよい」など、20件のコメントがあった。その中でも③利用者：阿忠(2013/10/23)は「『あまちゃん』は人生の甘えん坊だったヒロインの成長を描くという意味が込められている」と、脚本家の宮藤官九郎の発言を引用し、議論した。番組名に加え、劇中でよく使われる方言の「じえじえ」の翻訳も大きな議論となった。④利用者：doda(2013/10/23)は「小海女のじえじえ」のトピックに、「方言の『じえじえ』を中国語の『接接接』で訳すとおかしいよ。英語の『JJ』とか『嗟嗟』にしたほうがよい」と投稿した。音訳か意識かという対立意見があり、⑤利用者：接接接(2013/11/15)の「接接接に最初は違和感を感じるが、見ているうちに慣れて、いいじゃない？」、⑥利用者：Francis(2013/11/16)の「接接接は可愛いよ」という発言など、20件のコメントにはテレビ局の翻訳に賛成の声が多く見られた。番組名や劇中の用語の翻訳をめぐる大きな議論となった合計50件近くの投稿から、二つの現象が読み取れる。まず、緯来日本台で正規放送される前に、すでに全編視聴した視聴者が存在し、なおかつ彼らは緯来日本台の放送もフォローし、『あまちゃん』を「再視聴」する意向・行動があることが掲示板での発言によって推測できる。さらに、すでに『あまちゃん』を視聴した利用者の積極的な投稿から、当番組への高い支持や熱中度が感じられる。

3.11 後のアキの帰郷に対しては、⑦利用者：電視観衆(2014/1/14)による「理解に苦しむ。一時帰省して、東京の仕事復帰はできないの？なぜ東京の仕事をやめるの？」という、大地震の後、簡単に頑張ってきた東京でのアイドル業を諦め、そのまま北三陸に居残ることを疑問視する投稿があった。「まさかアキは最初からアイドルなんかただの遊びなだけ？と思っているかも」と発言し、16件のコメントが寄せられた。⑧利用者：～(2014/1/14)は「あんた、このドラマちゃんと見ているの？」「故郷があるから今の仕事がある。アキは自分の地元を大事にしているだけ」と述べ、⑨利用者：御宅怪胎(2014/1/14)は「私もそうするよ。自分の大事な故郷がこんな大きな災害に遭った時、そうするのは普通でしょう」とアキの行動に賛同した。⑩利用者：路人(2014/1/17)は「価値観の違いでしょう。アキは自分の故郷を大事にしているから」「アキの立場から考えてみれば？」などの意見を投稿し、このほかにもアキの帰郷を応援する意見が続々と述べられた。そのほか、「情報訴求」に関する投稿では、⑪利用者：konima(2013/11/27)は「春子ママが歌った曲」というトピックで質問し、「潮騒のメモリー」に関する情報提供が熱心に行われ、歌詞の翻訳を求める利用者もいた。ほかにも、⑫利用者：小熊(2013/12/4)は「綺麗な女性アナはだれ」、⑬利用者：白金(2013/12/13)は「政宗の彼女を演じるのはだれ」と、ドラマに登場したタレントを質問し、それに対しそれぞれ熱心に回答する利用者から多くの「情報提供」コメントが寄せられた。

さらに、「朝ドラ番組への関心」に関する投稿は、朝ドラというシリーズ枠を意識し、緯来日本台の朝ドラ放送に期待したり、⑭利用者：a226157(2013/10/24)が「なぜ『純と愛』の放送を飛ばしてしまったのか」と質問したりするなど、「朝ドラの愛好者」がある程度存在していることを確認できた。「日本関連情報」には、鈴鹿博美を演じる薬師丸ひろ子に関する投稿や、⑮利用者：Francine(2013/11/23)による若い頃の春子を演じる有村の「ヘアスタイルは80年代の中森明菜にそっくり」という投稿、⑯利用者：uuu(2013/11/25)のトピック「聖子カット」への「台湾のアイドルも昔日本のアイドルを真似してたんだよ」という投稿など、台湾と日本の80年代のアイドル情報を懐かしく討論する発言があった。「そのほか」に該当する投稿には、視聴者の放送時間や予告編でネタバレなどへの不満が続出しており、『カーネーション』と同じく、テレビ局への苦情が目立つ。以上のように、『あまちゃん』への「ドラマへの感想」に関する投稿は、翻訳の討論が50件、物語に関する討論が最も多い73件で

ある。ヒロインのアキに関する投稿は48件、母・祖母役は26件、相手役は25件、ほかの登場人物への関心は34件である。また、脚本家を賞賛するコメントが14件ある。『カーネーション』と比べて、話題はヒロインへのみ集中するのではなく、ほかの登場人物や、物語の展開に注目する投稿が多く、『カーネーション』とは異なる視聴者の書き込み傾向が読み取れた。

4. まとめ

以上の『カーネーション』と『あまちゃん』に対する掲示板の投稿の分析から、台湾の視聴者の朝ドラ受容と理解に関する現象の一部が観察できた。『カーネーション』の場合、ヒロインを中心にその魅力に圧倒され、生き方を賛美する書き込みが多数である。日本のテレビドラマがアジア圏で流通した理由について、岩淵(1995, 2003)が「文化的近似性」(Cultural proximity)を提起したように、台湾の視聴者が朝ドラに描かれた女性の生き方、及び家族のあり方に「共感を得た」という反響が多い。一方、『あまちゃん』の視聴者間で生まれた翻訳の正確さをめぐる議論は、「緯来日本台」で放送される前に視聴済みの視聴者の存在を裏付け、数回にわたって視聴するという視聴パターンが観察できた。なお、『あまちゃん』のヒロインが東日本大震災をきっかけに帰郷する設定に疑問を持ち、ヒロインの生き方を批判する視聴者の意見は文化的理解の違いを語っているようにも考えられる。台湾と日本の「文化的近似性」による文化コンテンツの共有が視聴者の共感を呼ぶ大きな要素だと言えるが、ドラマ自体の魅力も重要な役割を果たしている。以上の分析から台湾での朝ドラブームの再燃が確認できた。このように、朝ドラの視聴を通して台湾の視聴者は日本の文化・社会を理解し、さらにドラマで描かれた文化の相違を議論する場として、インターネット掲示板は作用していると考えられる。分析により、海外における朝ドラの視聴者の実態の一部を解明したが、今後はほかの作品と比較するなど、さらなる緻密な分析が必要である。

補注

¹「緯来日本台」＝ビデオランド、緯来テレビネットグループ傘下のケーブルテレビチャンネルで、1996年に開局した。台湾における日本のテレビ番組専門局として位置づけられ、ドラマ・バラエティ番組などの版權を速やかに購入し、近年は日本との同時放送など、積極的に企画を打ち出している。

²Svenkerud Rahoi, "Incorporating ambiguity and archetypes in entertainment-education programming: Lessons learned from Oshin", PAULASHARVEY, "Nonchan's Dream: NHK morning serialized television novels" (1998), Christine R. Yano (2010), "Becoming Prodigal Japanese: Portraits of Japanese-Americans on Japan Television"

³「中国電視公司」とは台湾の地上波テレビ局であり、台湾の2局目のテレビ局として1969年に開局した。台湾電視公司及中華電視公司及並び、台湾において最も歴史を持つテレビ局である。『おしん』がゴールデンタイムである夜8時に放送されたことがきっかけで、海外番組の放送が過熱すると国内の劇番組の制作費や芸能人の仕事などが圧迫される恐れがあると、台湾の演芸工会（芸能組合）は抗議した。

⁴筆者が2014年6月に行ったテレビ局ホームページの問い合わせフォームでの質問への回答である。原文は中国語、筆者訳。

⁵「晨間劇」＝「朝のドラマ」というニュアンスで、近年では朝ドラを「晨間劇」と呼ぶことが多い。

⁶分類は筆者がまず全ての投稿を読み、カテゴリーを作成した後、基準を説明した中国語のわかる日本語学科の学部生1名に協力してもらい、分類が合致しなかった投稿を再度確認することで判断の客観性を確保した。

⁷本稿の分析対象は、2015年1月31日までの投稿である。

参考文献

- 岩淵功一(2003)『グローバル・プリズム：アジア・ドリーム』としての日本のテレビドラマ』平凡社
- 黄馨儀(2014)『メディアの女性文化：テレビドラマにおける女性表象とその社会的意義—NHK朝の連続テレビ小説を例に—』同志社大学社会学研究科メディア学専攻博士後期課程学位論文
- 斉藤慎一(1998)「メディア変容の時代におけるオーディエンス研究」『マス・コミュニケーション研究』No.53, pp.34-52.
- 西田善行(2009)「「視聴者の反応」を分析する—インターネットから見るオーディエンス論」藤田・岡井(編)『プロセスがわかるメディア分析入門』世界思想社
- 牧田徹雄(1976)「NHK連続テレビ小説の考察」『NHK放送文化研究年報』21号, p.79-94
- 長谷川典子(2004)「インターネット掲示板のエスノグラフィ—日韓異文化コミュニケーション研究に向けて」『多文化関係学』No.1, pp.15-29
- 林芳枝(2003)『女性主義と社会建構的觀點 女性と媒體再現』巨流圖書公司